



## がん死防ぐ検診

樹木希林さんなど相次ぐ著名人のがん死亡を聞くと、「日本ではがん死亡が増えている」という印象を受ける。たしかに国立がん研究センターによれば、日本人が生涯でがんになる確率は女性で47%、男性では62%にも上る。1981年以来、死亡原因の1位であり、2017年には37万人以上が亡くなった。

しかし、がん死亡が増えているかどうかは、社会の高齢化を差し引いて考えなければならぬ。がんは加齢とともに増えるからだ。そこで重視されるのが年齢調整死亡率だ。これはがん死亡の割合を、基準年の人口の年齢構成に合わせて計算する。それによると、男性のがん死亡は約20年前から減少に転じ、女性はずっと前から減少している。臓器別ではすい臓や乳房、子宮頸部<sup>けいぶ</sup>では減っていないが、胃、肺、大腸で減っている。

国際的には、以前は日本よりはるかに高かった欧米の男性のがん死亡率は日本並みまで減少した。中でも米国は日本を下回っている。その理由が欧米でのがん検診受診率の高さだ。早期発見・早期治療でがん死亡率が低下したと考えられている。日本でも、国が推奨しているがん検診の対象である胃、肺、大腸、乳房、子宮頸部の五つのがんの治療から5年後の生存率は、早期の場合、すべて859割を超えている。がん検診の有効性は明らかだ。

しかし日本では長年、がん検診受診率の低さに頭を悩ませている。世界的に行われている乳がん検診をみると、欧米諸国で7割を超えるのに対し、日本は4割台。福井県も同水準だ。がん検診の意義と正しい受け方を県民にぜひ知ってほしい。

(県民健康センター所長)